

2024年8月11日（聖霊降臨後第12主日、特定14、B年）

牧師メッセージ

「私が命のパンである」

（ヨハネによる福音書6：35, 41-51）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音書に登場する人々は、目の前に救い主がいるにもかかわらず、それがわかりませんでした。彼らはイエスの故郷の人々でしたから、ある面ではイエスをよく知っていました。ゆえに、「これはヨセフの息子ではないか。我々はその父も母も知っている。」とつぶやき合い、イエスを自分たちの了解可能な範囲に引き釣り込んでしまい、イエスの言葉を理解しようとしませんでした。

つぶやきとは恐ろしいものです。自分の中からポツリと出てくるその言葉は、自分自身すら気づいていない自分の思いを反映しているものであったり、自分の腹の何処かにある本音であったりします。良い思いならまだしも、悪い思いならそれはとても厄介です。それが言葉になるとその言葉は力を持ち、その人の心を支配します。そしてそれは無自覚なままに他者と自分との隔てとなり、他者の思いや、言葉を遠ざけるのです。つぶやきに支配され、隔てで覆われた人にイエスの言葉は届きません。

「バタフライ効果」と言われることからつぶやきの怖さを感じます。最初は誰も信じないような小さな誰かのデマや噂のつぶやきが、いつの間にか広まって真実のようになってしまう、ということがあります。ナチスが台頭したことの背景にバタフライ効果があったとよく言われますが、現在は、インターネット上のちょっとしたつぶやきが、インターネット上で拡散されていくうちにまるで真実の情報のようになってしまふことが毎日のように起こっています。イエスの御受難の時、「十字架につけろ！」と叫んだ群衆の叫びこそ、まさにつぶやきと比例して増幅した憎悪の塊でした。この叫びには内実などなく、ただ増幅したつぶやきの力が満ちただけでした。そのような「つぶやき」の恐ろしい力を知っているからこそ、イエスは「つぶやき合うのはやめなさい」と言われたのです。けれども、人間のつぶやきが止むことはありませんでした。今日の福音の小さなつぶやきから、イエスを十字架につける罪はもう始まってしまったのです。

しかし、イエスはそんな人間のことを知っていながらも、「わたしが与えるパンとは、世を生きかすためのわたしの肉のことである」と言い、その肉によって、すべての人に救いの道を開いてくださるのです。つぶやくことをやめられず、そしてどんなに裏切り、嘘をつくような人間であっても、神の御子を殺すほどの罪を犯す人間であっても、イエスは自らを差し出し、その命を養い、生かそうとされるのです。神は、何度人が神から離れようとも、イエスという真のパンによって養い、赦し、そしてそのイエスを通して神との親しい交わりへとわたしたちを迎えてくださいます。つぶやきを離れ、わたしたちを生かす真のパンであるイエスの声をこそ聞きながら、歩んでまいりましょう。